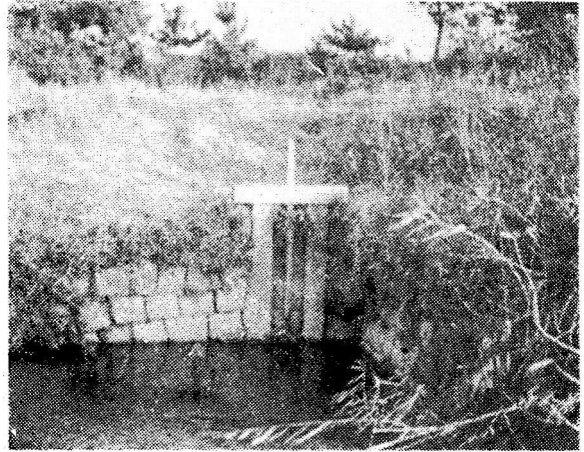


三、 祇 王 井 川

45 (一) 祇王井川の伝説

永子「おぢいさん、今日学校の祇王井川の立札を読んだら『祇王井川は祇王という美しい女の美しい心によって掘られたと伝えられる』と書いてあったが、どんな伝説があるのですか。」



(祇王井川の樋)

祖父「そのお話かね。それは立札に書いてあるように、今から凡そ八

46 百年前高倉天皇の代に、本村の中北、その当時は江部庄と^{とじ}いっていたが、そこに^{たちばな}橘九郎時定という武士が住んでいた。妻^{とじ}刀自との間に美しい女の子が二人あった。姉を祇王、妹を祇女と呼んでいた。ところが不幸にも父に早く別れ、親子三人しかたなく京都に出て五条坂の辺に住んだ。祇王、祇女は共にお母さん思いで、顔も美しく、心もやさしい姉妹で、特に歌や舞に秀でた白拍子となった。間もなく時の関白太政大臣平清盛に仕え、大へん可愛がられ、母には新しい家を与え、毎月米百石、銭百貫を送ることになった。彼女等三人には俄に幸福の春の日がやって来た。或日清盛は祇王に向かって「一番望むものは何か。」と尋ねた。祇王はうやうやしく「私の郷里(江部庄)は田水に乏しく、毎年灌漑に苦しんでいます。若し旱天ともなれば稲苗は枯死して一粒の米も収穫することが出来ません。ために荘民は飢餓に瀕します。郷里に水利の便が開かれないというのが、一番の望みです。」と答えた。清盛は感心して「その井川を掘ってつかわす。」と、早速にその奉行に瀬尾太郎兼康を命じた。

奉行兼康は余りの大事業にどこをどう掘り進めばよいかに迷った。すると一人の童子が現れ、兼康に向って「我その道を教えん」といつて野洲郷(野洲町)の大河(野洲川)より野田浦(兵主村野田)まで、縄印をつけてどこへか消えて行った。この縄に沿って工事を進めるとすぐさまに立派な川が出来上った。これが今の祇王井川であるんだよ。この不思議な童子を敬ってお祭りしたのが、江部の『土安神社』であるんだよ。こうして出来た新しい川には満々と美しい水が流れ続いたが、祇王一家の夢のような生活は長くは続かなかった。加賀国より年十六歳の仏(ほとけ)という歌舞の上手な白拍子

47

萌えいづるも 枯る
ゝも同じ 野辺の草
いづれか秋に あは
ではつべき

が現われてからは、祇王は清盛に仕えることが出来なくなり、住みなれた御殿の障子に泣く泣く一首の歌を書きとどめて、嵯峨の奥に一つの庵を結び、そこで念仏の生活をした。この庵が今の往生院妓王寺である。そして祇王は建久元年（一一九〇年）七月十五日三十八歳で世を去った。今、中北にある妓王寺は祇王親子の冥福を祈るために建立された寺なのだよ。大正年間には祇王をたたえた碑が建てられた。一度お詣りするのもよいことだよ。」

永子「よく分かりました。祇王村という村名も又この美しい祇王さんの名をとったものですね。ほんとに祇王さんは立派な心の美しい人ですね。」

祖父「永子や、この伝説によって、平家の国家政策が如何に良田をつくるために土木事業に力を入れたかということがうかがわれるよ。そして祇王井川が今日まで如何に本村の農業に重大な関係をもってきたかを調べることも亦面白いことだよ。」

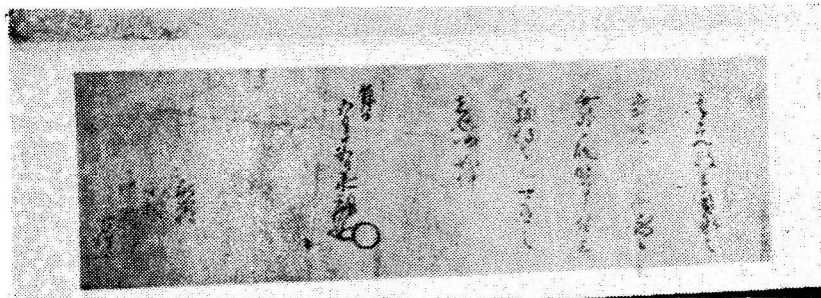
永子「おぢいさん。私達も次の社会の時間から『祇王井川と農業』という題で勉強するのですよ。」

48

（二） 祇王井川と農業

（イ） 水 争 い

水田の字が示す如く、稲田にとつては水が充分にあるということが一番大切な要件なので、田用水については昔から身命を賭した争論があちこちで度々起った。これ等を裁いた奉行所から村人へ送った古文書や村々がとりかわした覚書があちこちに残っている。これが証拠として今日も尚堅く約束が守られている。これらを慣例というのである。



（永禄八年の下知状）

祇王井川は大字永原・北・中北（昔の江部庄）の生の水で、この井水については、古くから幾度か争いが起った。現存する古文書に現われた争いの最初のものは、永禄八年（一三六五年）五月十五日に佐々木承禎が永原村、北村、中北村の百姓中に宛てて出した下知状一通である。これは今から三百八十七年前の正親町天皇の御代のことで、將軍義輝が三好・松永等に殺され、織田信長が岐阜を攻略し、毛利元就

永禄八年の下知状は
大字北永原中北の共
有にして大切に保存
されている。

49

北五郎左衛門は北村の五郎左衛門のいみか。

四家は又四屋とも書かれ今は四谷と書いている。

元禄七年の裁決書は今日も三ヶ村共で保存されている、それには元禄七戌年壬五月二十一日としてある。

が尼子氏を亡ぼし、外国ではイギリス人がアメリカ、アフリカ間の奴隷売買を盛んにやった時代の頃で農民は重い税と戦災に苦しい生活を営んでいた。確実な史料といわれるものに後水尾天皇の元和四年（一六一八年）二月に北五郎左衛門から芦浦観音寺以下に宛てて出した書状がある。これは野洲町の行合、四家等の村々に対して切り埋めの掘上げを請うた争いである。次は明正天皇の寛永十三年（一六三六年）八月二十九日江部庄へ、行合村、久之部村、三宅村、五之里村、沢村、新町村、四屋村が用水について証文を入れている。霊元天皇の寛文七年（一六六七年）には江部庄（永原・中北・北）と虫生村（中里村大字虫生）との間に樋について争論を生じ、複雑を極めたと見え、論争は久しく続いて、元禄七年五月二十一日漸く裁決を見た。次に大きな争論は寛文十年（一六七〇年）の水論である。これには検使を請い水路図を作製した。この時は井口が論所となり、地図には井口に注意がしてある。この地図は横七尺九寸八分、堅三尺六寸という相当に大きなもので、井口より童子川まで全長一里三十一町三十五間五分と明記している。これには裏書があって詳しい判決文が書かれている。この古文書は大切に大字北の部落長が保管している。明和七年にも小南村（篠原村小南）と北村との間に川浚いことから水論が起ったが、同年十二月二十五日に裁決を見るに至った。最近で一番大きな事件は明治二十八年より三十二年までの数年間に亘り地方裁判所より大審院にまで上告した矢萩樋用水権確認事件であろう。

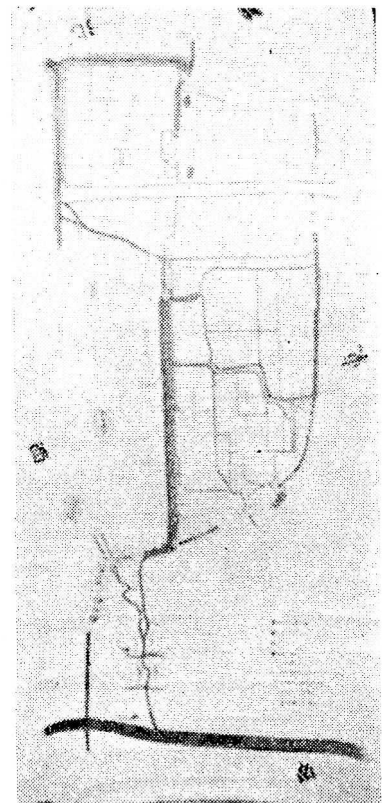
50

（口） 水量豊かな祇王井川

大井川は祇王井川の支流故、王井川とも書かれている。

現在の家棟川下の樋は岩田孟吉氏が村長の時代明治二十五年十一月に起工し、二十六年三月竣成す。

祇王井川の水源は野洲川に発し、間もなく祇王井川と大井川に分れ、祇王井川は行合町（行畑）を通り朝鮮人街道に沿って下り、富波に入り、生和神社の森の東隅にて二分し、一つは北に流れ、一つは東に流れる。北に流れるものを西祇王井川と云って本村西方に至って童子川と合流し、大字永原（江部）中北、北の西部を通り、江部、中北、北の西部田地に灌しつつ北流して琵琶湖に入る。東に流れるものを東祇王井川と云い。大字富波の中央を横断し家棟川の底を貫通して永原の中央を流れ、学校前を過ぎて野に出て、田用水の役目をなしつつ、北村の地先に入り、朝鮮人街道に沿って深沢に至る。



（寛文十年作製の祇王井川地図）

- 51 | ここで朝鮮人街道の下を土管で通り、新川に落ち、琵琶湖に入る。これが現在の東祇王井川の水路である。(十数年前深沢開拓が完成されるまでは大溝川に流れ落ちて、童子川に合流していた)

参考に郷土誌に記されている祇王井川の延長及び幅員は左の通りである。

川名	所属大字名	延長	幅
西祇王井川	富 波	201町 4間半	2間
	永 原	5町16間	2間
	中 北	6町29間	1間3尺
	北	7町 5間	2間
東祇王井川	富 波	6町 3間	5尺
	永 原	10町55間	1間
	北	19町 6間	1間2尺

出湧をまた湧池とも壺ともいつている。

- 52 | この祇王井川は常に水量豊富にゆるやかに流れているのは水源を野洲川にもつからである。野洲川は一見水無川のようにであるが、実は決して水無川ではない。平常水量が少い事は少いが幾分の水を有し、堤防下の樋口へ流れ出してくれる。又日照りつづきになると河原は水どころか沙漠となってしまうが、天の恵みかこの河原の下には地下水流や伏流があって、これが堤防の下で「出湧」に湧き出してくれる。これこそ命の親である。これが強い日に照らされて生気を失った稲に活を入れてくれるのである。しかも河床や沿岸の砂や礫にこされてから湧出するものであるから、他地方の泥土地の掘井戸より湧出する地下水よりも清浄で飲料水に沿岸の村々ではしている。こうした野洲川の恵みを忘れてはならないと共に又雨時の氾濫の防ぎを怠ってはならない。又この祇王井川は伝説に童子の案内によって掘ったといわれるだけに野洲町全体の川水をうけいれるようにつくられている。それだけに受益の田地面積も大きい。今新しく設立された野洲川水利組合の祇王井川受益面積として発表されたものによれば左の通りとなる。

永原	五〇五反七畝	}	計	一三四町九反六畝
中北	二一二反一畝			
北	六三一反八畝			

(八) 井登と番水

鐘や太鼓を合図に鋤や鍬を肩にして会議所に集り、話声も賑やかに村を出て、いよいよ井筋の浚渫だ。「ここはもっと掘っておけ、」「この杭は新たにせねばならぬ。」などと云って川上へ登ってついに井口に達する。この川掃除を井登といってどの村にもそれぞれ井登があ

十ヶ村
行合村
久之部村
三宅村
四谷村
五ノ里村
沢村
新町村
永原村
中北村
北村

53

る。この祇王井川は昔は春季二回あり、一回は十ヶ村が同日に出動して川上に各々登り、ついに野洲川の井口で十ヶ村が会うことになっていたが、今は十ヶ村同日の井登は廃止された。此頃では毎年春一回行い、三大字一戸一人出て使役に服する。春、井登されるのは五月ともなれば田用水が必要となるから、こうした季節に川筋を美しくさらえておくのである。

田用水も平年なれば問題はないが、旱天つづきになれば、水一升金一升と云われて、水争いが起りやすい。そこで永原、中北、北の間で規定をもうけて分水する。このことが即ち番水なのである。番水は永原一日一夜、中北一日、北一日二夜輪番交代で灌漑する。そして井筋にかかる一切の経費の分担は永原三分五厘、中北一分六厘四毛、北四分八厘六毛と定められていると、郷土誌には載せている。

(二) 逆水と吸上げポンプ

科学の進歩はついに琵琶湖の水を新川の用水路によって祇王村にまで逆流させた。これによって大字北などは祇王井川の水との両方を灌漑に用いることが出来、水論は昔の語りぐさとなり、他の各字も電力による大きな吸上げポンプにより地下水を吸上げ、これに各字専用の井川水を併用して灌漑には便利のよい農村となった。

将来は排水に就いて研究し努力を払わねばならない村となった。